様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００２０

研究課題名（和文）正義と平和への社会倫理学的アプローチ（ケアの倫理との編み合わせを軸として）

研究課題名（英文）Socio-ethical approaches to justice and peace: with special reference to "an ethic of care"

研究代表者
川本　隆史（Kawamoto, Takashi）

国際基督教大学・教養学部・特任教授

研究者番号：４０１３７７５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　先行する科研(C)「ケアの社会倫理学の方法論的定礎（脱集計化と記憶のケアを軸として）」を足場として、上梓に漕ぎつけた共編著『忘却の記憶　広島』(月曜社2018年)を、本プロジェクトの研究成果のトップに挙げねばならない。ついで上智大学で開かれた国際シンポジウムに参加し、その場での発言記録も『核廃絶：諸宗教と文明の対話』岩波書店2020年）に収録されている。最終年度には、ロールズの第二の主著『政治的リベラリズム』訳書(筑摩書房2022年）に「解説」を寄せることができた。
　これらの成果を新たに交付を受けた科研(C)「記憶のケアの社会倫理学」に生かし、さらなる深化・展開を図る所存である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　正義論と平和学とを別個の隣接領域と見なして、両者の重なりやずれ具合を外側から測定するといった没主体的なスタンスを採らず、ケアの倫理との《編み合わせ》を基軸に据える内側からの方法論的探究を主眼とした。ピアジェ心理学の概念である「脱中心化」を社会倫理学の方法へと組み換えながら、正義をjust（まともな）という形容動詞へと、ケアをcaring（ニーズを気遣う）という形容詞かつ「ケアし合う」という動名詞へとほぐすことにより、正義とケアの《編み合わせ》を推進した。
　「脱中心化」のアプローチは「被爆体験の継承」を企図する被爆二世との交流を通じて、その有効性や意義を確認しえている。

研究成果の概要（英文）：　Following from Kaken (C) Project "A Methodological Foundation of a Social Ethics of Care: Refinements of 'Disaggregation' and 'Caring for Memories'", I coedited the collection of essays " Bokyaku no kioku: Hiroshima (Memories of Forgotten Things: Towards the Critical Contemporary Local History of Hiroshima)" (Getsuyo-sha, 2018), which must be listed as the top research result of this project. Next, I participated in an international symposium held at Sophia University, and the record was published as "Nuclear Abolition: Dialogue between Religions and Civilizations"(Iwanami Shoten, 2020). In the final year, I submitted a commentary to the Japanese translation of Rawls's second major book, "Political Liberalism" (Chikuma Shobo, 2022).
　I intend to make use of these research results in the newly granted Kaken (C) Project "Social Ethics of Caring for Memories" to further deepen and develop them.

研究分野：社会倫理学

キーワード：正義　平和　社会倫理学　ケアの倫理　編み合わせ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者（以下、代表者）は、ジョン･ロールズの『正義論』によって口火を切られた現代の社会正義論およびキャロル･ギリガンの『もうひとつの声』が「正義の倫理」への対抗軸として打ち出した「ケアの倫理」をめぐる論争の追跡調査に基づいて、正義とケアを兼備する社会のあり方を探り当てようと努めてきた。他方、被爆都市･広島で受けた「平和教育」に強く動機づけられた代表者は、平和学および平和運動に対する参与観察もたゆまず続けている。本研究プロジェクトはそうした積年の蓄積をベースとして、**正義と平和への社会倫理学的アプローチ**の錬成を企図したものである。正義論と平和学とを別個の隣接領域と見なして、両者の重なりやずれ具合を外側から測定するといった没主体的なスタンスを採らず、ケアの倫理との《編み合わせ》を基軸に据えた、内側からの方法論的探究を主眼とする。ここでの《編み合わせ》とは、二つの概念の統合･補完を無媒介かつ機械的に行うのではなく、正義とケアのそれぞれが名詞として固まる手前の語法にまで立ち戻って、両者をほぐし･つなげようとする試行の謂いにほかならない。

代表者が大学院博士課程に進学した年にロールズの**『正義論』**（原著**1971**年刊）と出会い、①自由の平等分配と②「最も不遇な人びとの暮らし向き」の改善を要請する「正義の二原理」、さらには生活と学問の双方に向き合いながら道徳原理の定式化を粘り強く進める「反照的均衡（**reflective equilibrium**）」の方法に深い感銘を覚えてから、早くも**40**数年が経過している。

大学院修了後、女子大学に職を得た代表者が女性学・フェミニズムの文献の渉猟を始めた矢先に、ギリガンの**『もうひとつの声』**（**1982**年）の存在を知らされ、同書が標榜する「ケアの倫理」に目から鱗が落ちる思いを抱いた。関係する事態の全体を満遍なく見渡して「何が正しいのか」を考究する「正義」の視点が、社会倫理学の枢軸をなすことは論をまたない。しかしながら、目の前で苦しんでいる一人ひとりの有言・無言の訴えに「どのように応答すればよいのか」を模索する「ケア」の視点も、欠かすことができないだろう。すなわち、「普遍的な公平さの実現と個別のニーズへの応答とを同時にかなえる社会とは、どんなものか」という核心的な問いへと導かれたのである。

こうして**1980**年代半ばから始まった「正義対ケア」論争に注目し、紹介者の一人となった代表者だが、「正義かケアか」の二者択一を迫る論法に当初より違和感を覚えていたこともあり、正義を「正しい・まともだ」という形容詞・形容動詞に差し戻すことによって、「まともなケア」あるいは「ケアの正しい分かち合い」をサポートする「後ろ盾となる諸制度」（『正義論』第**43**節）を構想するという路線をあえて進もうとした。その成果の一端を公論の場に送ったのが、編著**『ケアの社会倫理学』**（**2005**年）である。

他方、広島で生まれ育った代表者は、原爆被害当事者による恒久平和と核兵器廃絶を求める訴えに共鳴するにとどまらず、同世代である被爆二世の運動への協力･関与を開始し、二世との

交流を通じて**「記憶のケア」**という着想を得るにいたった。すなわち、「記憶」を無機質の情報の塊りとして操作・対象化するのではなく、いわば〝生き物〟のように見立てて、これを注意深く世話し手入れする営み（ケア）を、「記憶のケア」と名づけてみたのである。被爆のような痛苦な記憶であればあるほど、固定観念や「神話」へと凝固して人びとを縛る傾向がある。この凝り固まりを丹念にほぐしながら、もとの記憶に歪みや欠落がないかを丁寧に**(carefully)**点検するところに、「記憶のケア」の真骨頂がある。国際シンポジウムや種々の集会･講座などの機会を捉えて、この自前の用語を使い彫琢を重ねた代表者は、いくつかの論考に盛り込んだこのアイデアに対する直接・間接の反響やコメントから学んできた。

以上のような経緯を踏まえて、正義およびケアの問題群にアプローチしようとする際に**「脱中心化」（decentration）**と**「脱集計化」（disaggregation）**という二つの方法的な構えが有効であることに気づかされ、まずは「脱集計化」の方法を鍛える作業から着手した（科学研究費**(C)** 課題番号**15K01985**の交付を受けたもの）。本研究はこの先行プロジェクトを踏まえ、「脱中心化」の方法を自覚的に用いながら、正義を**just**（まともな）という形容動詞へと、ケアを**caring**（ニーズを気遣う）という形容詞かつ「ケアし合う」という動名詞へとほぐすことにより、正義とケアの《編み合わせ》を図ろうとしたものである。

２．研究の目的

本研究が目指す《編み合わせ》とは、哲学者･鶴見俊輔が語った《編み直し》から示唆を得ている。この語は、もともとイマニュエル・ウォーラーステインが社会科学の「19世紀パラダイム」の限界を剔抉するために採った《unthinking》という身構え（＝方法的態度）に対して、鶴見俊輔が与えた絶妙の訳語である。鶴見によれば、unthinkは「考えを戻す、またその考えを振りほどく」という反復行為を表す動詞であり、セーターをほどいて同じ毛糸で次のセーターを身の丈に合わせて編み直すように、ある思想体系（たとえばマルクス主義）に間違いが見られたからといって、これをそっくりそのまま廃棄するのでなく、誤りに対する共感をくぐりながら私たちの必要に合わせて元の思想を再編成する働きを指す。

鶴見の卓説を自らの探究の場に適用するならば、正義、平和、ケアといった語句にまつわりついた先入見をいったん括弧に入れて、それぞれのことばがどのような暮らしの必要から発せられたのかを探り当てる作業が肝要となるだろう。これら諸概念のほぐしを介して、時代のニーズに応ずるべくそれらを再編成すること（＝《編み合わせ》）を本研究は目指そうとした。

そうした《編み合わせ》を遂行する際の拠りどころとしたのが、ケアの倫理の核心をなす「非暴力の命法」（誰も傷つけてならない！）と観点の複数化を志向する「脱中心化」との二つであった。四年間の研究期間を通して、「正義と平和の社会倫理学」の方法論に関する共通理解を積み上げることを心がけた次第である。

３．研究の方法

具体的な研究方法としては、次の三つの柱を立ててアプローチした。

（１）「正義論」および「平和学」にかかわる各種現場の実態調査

複数の研究機関を定点観測の拠点に定め、定期的に調査出張を続ける傍ら、以前交付された科学研究費のプロジェクトとの連続性を図るべく、初等･中等教育の現場において「正義」や「平和」がどのように学ばれているのかも実地調査を試みた。

（２）正義と平和の社会倫理学に関わる文献の収集と読解

人文学のプロジェクトである以上、あくまで文献研究を主軸とした。「世界という大きな書物」（デカルト）を読み進めることを怠ってはならないが、小さな書物の細部にまで注意して読み深めることをあえて基本におこうとした。

（３）国内の研究機関・研究協力者との連携

本研究は代表者の個人研究として遂行された。とは言え「正義と平和への社会倫理学的アプローチ」を主題とするため、研究代表者ひとりの力のみで目的達成しうるものではなく、隣接分野の研究者や実践家の助力を仰がねばならなかった。その際、これまで築き上げてきた人的ネットワークをまず頼りとしたけれども、本研究を通じて新たなつながりが創出されるという成果も手に入れている。

４．研究成果

〔雑誌論文〕（計 **7** 件）

川本隆史「**[**指定討論**]Spirituality, Intimacy, Reason** をめぐって」、『救いと祈りの臨床』（日本「祈りと救いとこころ」学会誌）第**4**巻第**1**号、**2018**年、**79**～**85**ページ**(**査読無し**)**

川本隆史「書評：『ロールズの政治哲学――差異の神義論＝正義論』（田中将人著、風行社、二〇一七年）」、『社会思想史研究』（社会思想史学会年報）第**42**号、**2018**年、**151**～**156**ページ**(**査読無し**)**

川本隆史「大庭健　作品リスト」、大庭健『人‐間探求としての倫理学――遺稿』所収、**2019**年、**140**～**150**ページ**(**査読無し**)**

川本隆史「【編者による紹介】忘却の記憶　広島」、**UTokyo BiblioPlaza**、**2020**年、**https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/E_00189.html**

川本隆史「五〇年前に戻る／戻れる／戻れない――《記憶のケア》の活用」、『學鐙』**117**巻第**4**号、**2020**年、**10**～**13**ページ**(**査読無し**)**

川本隆史「**ロールズ・ヒロシマ・キルケゴール**」、『思想』**通巻1175号、岩波書店、2022年、2～5ページ(査読無し)**
https://www.iwanami.co.jp/news/n45945.html

川本隆史「**ウェーバー像の《脱集計化》と変革への静かな呼びかけ**」、『**Quadrante**』第**24**号、東京外国語大学海外事情研究所、**2022**年、**35**～**42**ページ**(**査読無し**)**
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/117427

〔学会発表〕（計 **9** 件）

川本隆史「医療、看護、介護、教育をどうつないだか――『ケアの社会倫理学』（有斐閣**2005**

年）を編み直す」、日本カトリック医師会広島支部講演会（招待講演）、**2018**年

川本隆史「正義と愛を〝学びほぐす〟――専門科目「キリスト教倫理」のねらい」、上智大学神学部夏期神学講習会（招待講演）、**2018**年

川本隆史「正義とケアを学びほぐす――吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』を活用して」、第**41**回**ICU**教育セミナー（招待講演）、**2018**年

川本隆史「キリガイ・キリスト教概論（いんくり）・キリスト教倫理――ＩＣＵの場合」、日本カトリック教育学会特別企画**II**：シンポジウム●キリスト教（宗教・倫理）の学び合い（招待講演）、**2018**年

川本隆史「記憶のケア・脱集計化・脱中心化――『忘却の記憶　広島』を編み上げて」、ヒロシマ連続講座第**68**回（招待講演）、**2019**年

川本隆史「記憶をケアする――生老病死をつなぐ技法として」、かわさき市民アカデミー（招待講演）、**2019**年

川本隆史「進歩史観の隘路・不条理な苦痛の軽減・人民の抵抗力の強さ」、【トークイベント】いま読み直す『歴史の進歩とはなにか』（招待講演）、**2019**年

川本隆史＋野家啓一「**10**年目の「物語り」と「ケア」」、市民向け公開シンポジウム**:**大震災と復興の行方（招待講演）（国際学会）、**2021**年

川本隆史「**南原繁「紀元節演述」をめぐる《期待と回想》――三島報告へのコメントに代えて」、社会思想史学会第46回大会セッションD：戦後思想再考、2021年**

〔図書〕（計　5 件）

ISBN: 9784865030655

東琢磨・川本隆史・仙波希望編『忘却の記憶　広島』、月曜社、2018 年、総ページ 432

ISBN: 9784621303412

社会思想史学会編『社会思想史事典』、丸善出版、2019 年、総ページ 888

＊項目「ロールズ」、「人権論の展開」、「ケア」を分担執筆

ISBN: 9784818410282

原敬子・角田佑一編著『「若者」と歩む教会の希望――次世代に福音を伝えるために』、日本キリスト教団出版局、2019 年、総ページ 200

ISBN: 9784000614375

上智学院カトリック・イエズス会センター＋島薗進編集『核廃絶：諸宗教と文明の対話』、岩波書店、**2020** 年、総ページ **228**

ISBN: 9784480867377

ジョン・ロールズ『政治的リベラリズム』、筑摩書房、**2022**年、総ページ**704**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 川本隆史	４．巻 117
２．論文標題 五〇年前に戻る／戻れる／戻れない――《記憶のケア》の活用	５．発行年 2020年
３．雑誌名 學鐙	６．最初と最後の頁 10‐13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川本隆史	４．巻 通巻11号
２．論文標題 『石原吉郎詩文集』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 河合文化教育研究所編『2020年版　わたしが選んだこの一冊』	６．最初と最後の頁 12-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川本隆史	４．巻 無し
２．論文標題 大庭健　作品リスト	５．発行年 2019年
３．雑誌名 人‐間探求としての倫理学――遺稿	６．最初と最後の頁 140-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川本隆史	４．巻 無し
２．論文標題 【編者による紹介】忘却の記憶　広島	５．発行年 2020年
３．雑誌名 UTokyo BiblioPlaza	６．最初と最後の頁 無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 KAWAMOTO Takashi	4．巻 無し
2．論文標題 Bokyaku no kioku: Hiroshima	5．発行年 2020年
3．雑誌名 UTokyo BiblioPlaza	6．最初と最後の頁 無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川本隆史	4．巻 無し
2．論文標題 戦後思想再考――戦後日本のヴェーバーとハイデガーの受容	5．発行年 2019年
3．雑誌名 第43回（2018年度）大会　セッション事後報告	6．最初と最後の頁 無し
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川本隆史	4．巻 第4巻第1号
2．論文標題 [指定討論]Spirituality, Intimacy, Reason をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 救いと祈りの臨床』（日本「祈りと救いとこころ」学会誌）	6．最初と最後の頁 79～85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川本隆史	4．巻 第42号
2．論文標題 書評：『ロールズの政治哲学――差異の神義論＝正義論』（田中将人著、風行社、二〇一七年）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『社会思想史研究』（社会思想史学会年報）	6．最初と最後の頁 151～156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川本隆史	4．巻 通巻1175号
2．論文標題 ロールズ・ヒロシマ・キルケゴール	5．発行年 2022年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 2～5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川本隆史	4．巻 24号
2．論文標題 ウェーバー像の《脱集計化》と変革への静かな呼びかけ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Quadrante	6．最初と最後の頁 35～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117427	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　8件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 川本隆史＋野家啓一
2．発表標題 10年目の「物語り」と「ケア」
3．学会等名 市民向け公開シンポジウム:大震災と復興の行方（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 川本隆史
2．発表標題 記憶のケア・脱集計化・脱中心化――『忘却の記憶　広島』を編み上げて
3．学会等名 ヒロシマ連続講座第68回（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 記憶をケアする――生老病死をつなぐ技法として
３．学会等名 かわさき市民アカデミー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 進歩史観の隘路・不条理な苦痛の軽減・人民の抵抗力の強さ
３．学会等名 【トークイベント】いま読み直す『歴史の進歩とはなにか』（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 医療、看護、介護、教育をどうつないだか――『ケアの社会倫理学』（有斐閣2005年）を編み直す
３．学会等名 日本カトリック医師会広島支部講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 正義と愛を〝学びほぐす〟――専門科目「キリスト教倫理」のねらい
３．学会等名 上智大学神学部夏期神学講習会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 正義とケアを学びほぐす――吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』を活用して
３．学会等名 第41回ICU教育セミナー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 キリガイ・キリスト教概論（いんくり）・キリスト教倫理――ＩＣＵの場合
３．学会等名 日本カトリック教育学会特別企画Ⅱ：シンポジウム●キリスト教（宗教・倫理）の学び合い（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川本隆史
２．発表標題 南原繁「紀元節演述」をめぐる《期待と回想》――三島報告へのコメントに代えて
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 上智学院カトリック・イエズス会センター、島薗 進	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 228（分担119-127;145-146）
３．書名 核廃絶 諸宗教と文明の対話	

1．著者名 東琢磨・川本隆史・仙波希望編	4．発行年 2018年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 432
3．書名 忘却の記憶　広島	

1．著者名 社会思想史学会編	4．発行年 2019年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 888
3．書名 社会思想史事典	

1．著者名 原敬子・角田佑一編著	4．発行年 2019年
2．出版社 日本キリスト教団出版局	5．総ページ数 200
3．書名 「若者」と歩む教会の希望――次世代に福音を伝えるために	

1．著者名 ジョン・ロールズ	4．発行年 2022年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 704
3．書名 政治的リベラリズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関